

---

北 川 博 一

---

1990年のソヴィエト連邦の崩壊で、世界でただ一つの「超大国」となったアメリカで、今、その現状、今までのあり方に対する反省と改革への「再思考 (Rethink)」が密かに進められている。

貿易赤字と財政赤字という「双子の赤字」に象徴されるアメリカ経済の衰退、それに起因する世界に於ける超大国アメリカの威信低下へのアメリカ人の苛立ちの一つの対外的な発動が、日本の経済構造改善要求である「日米経済摩擦交渉」と言えなくもない。

一方、米国内では1989年に出版されたイギリス生まれの歴史学者でエール大学教授、ポール・ケネディの「The Rise and Fall of the Great Powers」がベスト・セラーになり超大国と言えどもいつかは滅びる (mortal) との警鐘をアメリカ人に伝えた。さらに、昨1995年ピューリッツァ賞受賞の気鋭のジャーナリスト、ヘドリック・スミスの新著「RE-THINKING AMERICA (アメリカ再思考)」が話題を独占している。麻薬、ホモ、エイズ、殺人、ホームレス等々に代表される、かつてアメリカ人が世界に誇った豊かなアメリカ社会の「負」の側面がどうして発生したのか、そしてその克服策は何かに焦点をあて、この著者は「教育こそその原点」と結論している。但し、この分析の大前提を「A NEW GAME PLAN」と規定し、単にアメリカだけに止まらずアメリカの強力な競争相手となっているドイツ、日本 (かつての敵国) に足を運び、その教育、社会、家庭環境などとの比較研究の中から解決策を検討している。世界一豊かな超大国という誇りをかなぐり捨て、躍進するかつての敵国の長所を研究し「再思考 (Rethink)」する姿を考察することは、従来の「追いつけ・追い越せ」の発想しか出来ない日本人の発想の貧困、創造力・想像力の欠如の克服に資する所、大であろう。

小学校教育から始まるスミス氏のアメリカ教育の「再思考」を点検し、今後日本人はどのように「再思考」すべきかについての私見を、昨年8月の訪米経験をも紹介しつつ発表する。